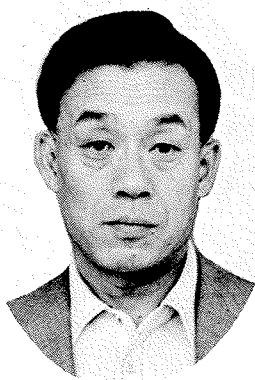


災害をふり返って



帯広土木現業所鹿追出張所長

矢部 英雄

「災害は忘れたところにやってくる」と言われますが、まさに昨年の集中豪雨はその通りでありました。

8月4日夜半からダム放流の通報が入り出し、5日早朝全職員を招集し4班に分けて管内のパトロールに出動させました。その後、橋梁がやられた、道路が流出した、築堤が破れそうなどの生々しい情報が相次いで入り、雨量の集録情報の伝達に当たっていた職員もその応援に出動するといった具合で、一時期事務所内は私一人になったこともありました。

一応の応急措置も終わり、翌日から忙しい毎日が続くと予想されましたので、職員を二交替に分け夜中の警戒体制に当たることにしましたが、ほとんどの職員は帰宅しないで事務所で待機していたようです。私も朝6時ころ家に帰り朝食が出来たら起こすように言って、長椅子に横たわった瞬間、鉄砲水のために避難命令が出たという連絡を受けたのです。

然別川とのかっとうはこれを境に始まりました。

災害復旧の第一歩は、被害の実態を把握することから始まりますが、水が引かないため河川に近寄れず被害状況もつかめないまま、ただイライラしたものです。

やがて被害状況が分かるにつれ、これは単なる災害復旧のみでは再び災害を受けるおそれがある、何とか計画的な改修をと判断し助成事業実施に踏み切った次第です。

しかし、この実施については3つの問題解決が必要でした。

1つは、査定までに調査と概略設計が間に合うかという問題でした。当出張所に河川関係技術職員は3人しかおらず、当然外部応援が必要となるわけですが、全道的な災害のためにその体制がとれるのだろうか、また測量業者にしても飽和状態で対応出来るのだろうかという心配が先に立ちました。

2つ目は、一定の改修計画を行えば必ず土地の利害関係が生じ、しかも全延長24キロと長いので関係者も多く果たして地元住民の協力と同意が得られるかどうか。

3つ目は、実施に踏み切れたとしてもこの膨大な事業を5年間で消化出来るのだろうか。私の胸中をさまざまな不安がかすめたものです。

幸い関係各位のご尽力と地元の皆様のご協力を得られまして今年2月に着工出来ましたことに、無上の喜びを感じていますと同時に、災害から助成着工まで短期間であったために地域の皆さんにはご無理ばかり押しつけまして、誠に申し訳けなく存じ、この紙上を借りまして深くお詫び申し上げます。

あの災害から一年を経過し、本年度の発注も2分の1を超えました。今現場では、ブルドーザーの音が力強く響き一日も早い完成と豊かな鹿追町がよみがえることを念じ、全員力を合わせて頑張りたいと思っております。

最後に鹿追町のますますのご発展をご祈念申し上げ、ペンをおきます。

昭和57年9月